

グラムシ『獄中ノート』体系の 理論的および方法論的構造

鈴木 富久

キーワード：グラムシ，知識人－民衆ブロック，歴史的ブロック，
活動的關係，ヘゲモニー

はじめに

1. 哲学の「根本問題」と「活動的關係」
 2. 「歴史的ブロック」と「活動的關係」
 3. 「実践の哲学」の体系と主体的前提の3次元
 4. 基調テーマと包括的な概念・論理の枠組
 5. 国際的－民族的視点と歴史の3次元方法論
- むすび

はじめに

筆者はこれまで、グラムシ『獄中ノート』¹⁾（以下、『ノート』と略称する）

1) Antonio Gramsci, *Quaderni del carcere*, Edizione critica dell'Istituto Gramsci, a cura di Valentino Gerratana, Giulio Einaudi editore, Torino, 1975. 本稿で、Qは、この『獄中ノート』を、その次の数字は各冊のノート番号を、§は各ノート内の覚書に記された番号（覚書番号）を表す。また「Q10II」等の場合、ローマ数字「II」は、Q10内の第II部であることを示す。覚書番号の次のA, B, Cは、Aは初稿、Bは初稿のみの稿、CはAの推敲稿であることを意味する。頁番号は、上記ジェルラターナ版のそれである。なお引用句で、山崎功監修『グラムシ選集』（全6巻）合同出版、1961-65年、に邦訳のあるものについては、「合」

の全体構造の解明に向けて、特にその論理構造と方法論に焦点を合わせて検討を重ねてきた。筆者としてのその到達点は、『科研費研究成果報告書』(2006年3月。以下『報告書』と略称する)²⁾ および、その「発展的総括」を試みた別誌掲載の拙稿(2007年3月。以下「総括」と略称する)³⁾ に著されている。

そこで明らかにしたことには、『獄中ノート』全体の主要なテーマを、①哲学、②政治学、③イタリアの歴史と文化の諸問題に関する包括的大テーマとしてのイタリア知識人史、④アメリカニズムとフォード主義、の4題として捉えることができるということが、含まれている。筆者はこれを「4大主要テーマ」と呼んだが、その①②は理論的な研究であり、③④は歴史研究であるという意味で、「4大主要テーマ」は、理論と歴史との「二重構造」をなしているとも指摘してきた。他方、①(哲学)－②(政治学)－③④(過去と現在の歴史)というテーマ構成は、グラムが『ノート』で繰り返す「哲学・政治・歴史の同一性」という命題に照応していることも明らかにしてきた⁴⁾。

また『ノート』における「2つの主体概念」として、人間(個人)と社会集団(階級)との2次元を析出し、そのいずれもが「歴史的ブロック」の概念でつかまれ、その概念的構成が「自己包括的複合体」という弁証法的な論理構造において成立していること、さらに、この論理構造は、「実践の哲学」総体の体系構造と同型のものであることについても解明してきた⁵⁾。

でそれを表し、ローマ数字で所収巻番号、次いで頁番号を示すが、訳文は同一と限らない。引用句内の亀甲印 □ 内は、引用者による注記である。

- 2) 単著『平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究C(2))A・グラムシ「獄中ノート」の全体的論理構造の基礎研究』(課題番号15530356)。
- 3) 「グラムシ『獄中ノート』体系の基本構造——科研費研究の発展的総括として——」『桃山学院大学総合研究所紀要』第32巻3号、2007年3月。
- 4) 『報告書』第6章。元稿「グラムシ『獄中ノート』の主題構成——『ノート』全容解明に向けて——」『桃山学院大学社会学論集』第38巻2号、2005年3月。
- 5) 『報告書』第7章。元稿「グラムシの階級概念と主体の論理」『桃山学院大学社会学論集』第40巻第2号、2006年2月。

さらに、前記「歴史」研究の次元における方法論（「歴史と政治の科学」の方法論）を意味するグラムシの「社会」科学方法論を探り、 α) 哲学、 β) 固有の「方法論的諸規準」としての「歴史と政治の研究と解釈の実際的諸基準」、 γ) 「歴史と政治の文献学」、というその3次元方法論を明るみにし、それを詳細に検討してきた⁶⁾。

そのほかに、階級論、市民社会論、将来社会像や、改めて再論した人間論なども俎上にのぼせたが、『ノート』全体構造の探求として特に重要なのは前記の諸点にあり、それを柱とすることにより、この全体構造の探求は着実な進展をなした、と筆者自身は思っている。

とはいえそこには、今日振り返ればいくつかの不十分さや問題点が散見されるだけでない。じつはまだ正面からは取り上げていない大きな一つの問題が残されている。それは、4大主要テーマをも貫き『ノート』全体の基調をなすような主題ないしテーマは何であり、それを捉える論理として『ノート』全体を支える包括的な概念や論理の枠組などは、いかなるものであろうか、といった問題である。これらの点が定かにならないかぎり、『ノート』の全体構造は明確にはならないであろう。

しかしながら実は、それだけでも足りないように思われる。『ノート』における「歴史」分析は、理論「適用」型ないし論理優越型ではないし、ましてや例証主義的ではまったくないからである。それゆえ、この文脈で上記3次元の歴史方法論があらためて取り上げられ、体系上のその位置がより明確化されねばならないであろう。こうした検討を通じて、『ノート』全体構造は、おそらく理論的および方法論的な重層的・立体的構造として捉えられることになるかと予想される。

そこで本稿では、これまでの研究諸成果を前提にして、こうした一連の諸

6) 『報告書』第9章。元稿「グラムシ『社会の科学』方法論の構造—哲学と経験科学—」(上) 前掲『総合研究所紀要』第31巻第3号, 2006年3月, (中) 同上, 第32巻第1号, 2006年7月, (下) 同上, 第32巻第2号, 2007年1月。

問題を検討し、『ノート』の全体構造をより十全に明らかにすべく努めることにする。

1. 哲学の「根本問題」と「活動的關係」

知識人と民衆の「社会的ブロック」の形成

全体の基調テーマについては、前記のように、『ノート』が①（哲学）－②（政治学）－③④（過去と現在の歴史）というテーマ構成からなり、「哲学・政治・歴史の同一性」がグラムシの見地であるとすれば、それを解く鍵は、彼における「哲学の根本問題」にあり、それが②にも③④にも貫流し、したがって『ノート』全体を貫く基調テーマをなすことになるのではないかと仮説的に考えることが可能であろう。グラムシにおける「哲学の根本問題」の所在は、次の言及に示されている（以下、段落区分をして提示する引用句には連番をつける）。

- (1) 「一つの文化運動、一つの『宗教』、一つの『信仰』となり、実践的活動と意思とを生みだし、その活動と意思のうちに暗黙の理論的『前提』として含まれているあらゆる世界観、あらゆる哲学（イデオロギーという言葉に、まさに、芸術、法、経済活動、個人的および集団的な生活のあらゆる表現において暗黙のうちに表れている世界観といういっそう高い意味を与えるならば、それを『イデオロギー』と呼ぶこともできるであろう）の根本問題、すなわち、まさにこの一定のイデオロギーによって固められ、統一される全社会的ブロックにおけるイデオロギー的統一性を保持するという問題が、設定される」(Q11 § 12C, p.1380. 合 I 242)。

みられるように、あらゆる世界観・哲学の「根本問題」は、その哲学（イデオロギー）によって形成される「社会的ブロック」全体のイデオロギー的統一性を保持する問題にあるといわれている。要するに、「社会的ブロック」の形成という問題である。グラムシがここで考えているこの「ブロック」の構成者は、知識人と民衆（大衆）である。そのことは、例えば次の諸言及からも明らかである。

- (2) 「思想の有機的統一と文化的堅固さとは、知識人と素朴な人々との間に、理論と

実践と間にあるべきものと同じ統一があったときにだけ、すなわち、知識人たちが、有機的にこの大衆の知識人であったとき、いいかえれば、その大衆がその実践的活動によって定式化した諸原理や諸問題を練り上げ、首尾一貫したものに、文化的社会的ブロックを構成したときにだけ、ありえたのであった」(Q11 §12C, p.1382. 合I 244)。

- (3)「知識人と民衆—国民との、指導者と被指導者との——統治者と被統治者との——関係が有機的に密着したものとなり、その密着において感情—情熱が理解となり、したがって知となる（機械的ではなく、生きた仕方で）とすれば、そのときにだけ関係は代表の関係であり、統治者と被統治者、指導者と被指導者とのあいだに個人的交流がおり、つまり、それだけが社会的勢力をなすところの共通の生活〔la vita d'insieme〕が実現され、『歴史のブロック』が創造される」(Q11 §67C, pp.1505-06. 合II 69. グラムシにおいては、「指導者」も「統治者」も「知識人」の範疇に属する)。

このように、ここで問題にしている「(文化的)社会的ブロック」は、知識人と民衆(大衆)とのそれであり、それは、後述するように、結局は「歴史のブロック」となるものである。それはともあれ、ここでは以上から、グラムシは、こうした知識人と民衆の「社会的ブロック」の形成が「哲学の根本問題」だと考えていた、ということができよう。

活動的關係 rapporto attivo

この場合、知識人と民衆との関係は、上の(2)(3)にも窺われるように、相互的であり、かつ知識人が指導的であるような関係として理解されており、そこにグラムシは「知識人—大衆〔の〕弁証法」⁷⁾を考えている。彼は、この「弁証法」を、現代的「教育学」における教師—生徒関係の弁証法に比定してもおり、むしろそこから、この教育学的な関係は、言語を介した相互的な活動的關係として、社会生活のいたるところに存在すると論じ、知識人—民衆関係をその一つに位置づけもする。それを示すのが、次の言及である。

7) Q11 §12C, p.1386. 合I 250.

(4)「この問題（「共通言語」・「相互理解」を通じて成立する文化的社会的統一性を達成する問題）は、教育学説と教育実践の現代的立場に近づけることができるし、近づけなければならない。それに従えば、教師と生徒との関係は、相互連関の活動的關係〔rapporto attivo, di relazioni reciproche〕であり、あらゆる教師は常に生徒であり、あらゆる生徒は教師である。しかし、教育学的關係は、新しい世代が古い世代と接触し、その経験と歴史的に必然的な価値とを吸収して、自分自身の人格を歴史的文化的に高次なものに『成熟させ』発展させるという、とくに学校にかかわる関係に限定されえない。この関係は、全社会総体のなかに存在し、他の諸個人に対するあらゆる個人に存在するし、知識人層と非知識人層とのあいだ、統治者と被統治者とのあいだ、エリートと追随者とのあいだ、指導者と被指導者とのあいだ、前衛と本隊とのあいだに存在している。あらゆる『ヘゲモニー』の關係は、必然的に教育学的關係であり、一つの国民のなかにおいて、それを構成する多様な勢力のあいだにおいて生ずるばかりでなく、国際的世界的な領域のなかにおいても、諸国民文明および諸大陸文明の総体のあいだにも生ずるのである」（Q10Ⅱ §44B, p.1331. 合I 270-71）。

ここから窺われるように、「活動的關係」は、相互的な言語行為を通じて相手に積極的に働きかける（そして相手を変える「教育学の」な）関係である。その諸例として列挙されている諸関係は、『ノート』に現れる主な諸関係であるが、それらは、「ヘゲモニー」を含めてすべて一般的にはこの活動的關係として考えられていることが、この言及からわかる。だから、知識人と民衆との関係も（知識人の側からする）「活動的關係」であり、両者が形成する「社会的ブロック」は、その要（かなめ）が、知識人の民衆に対する「活動的關係」にあるとこのようにであろう。

2. 「歴史的ブロック」と「活動的關係」

基本的階級の「歴史的ブロック」

知識人と民衆の社会的ブロックは、結局は「歴史的ブロック」の創造を意味する、と先に述べた。だが、「歴史的ブロック」という時には、これは、マルクス「序言定式」の独創的解釈に基づく「構造」（経済構造）と「上部

構造」(イデオロギー)との一体性を意味する概念である⁸⁾ゆえに、「構造」を構成する階級諸範疇を基礎にして、つまり階級論的な視角から、「民衆」と「知識人」とを捉え直すことが必要となる。グラムシにおいても、次の言及にみられるように、本質的には、哲学・イデオロギーは、つねに一定の階級のそれであるからである。

- (5)「一般に解させられているような哲学史、すなわち哲学者たちの哲学の歴史としての哲学史は、それぞれの一定の時代に現存している諸世界観を変革し、訂正し、完全にするための、したがって、それに照応する行為の規範を変えるための、あるいはむしろ実践的活動をその総体において変革するための〔per mutare la attività pratica nel suo complesso〕一定の階級の人々のイデオロギー的な試みと発案との歴史である」(Q10II §17B, p.1255. 合I 263)。

階級論的な捉え直しといっても、差し当たり必要なのは、①「民衆」を「従属諸階級」の総体として捉え直し、②この「従属諸階級」のなかで「社会的ブロック」の基軸となる「基本的階級」(他方では、すでに支配階級となっているもう一つの「基本的階級」)を識別し、③「知識人(層)」を、この二つの基本的階級各々の「有機的一部」として捉え直すといった程度で足りる。「知識人」範疇は、グラムシにおいて、独立した一階級をなす存在ではない。したがって、彼ら各々の経済的生活条件の階級的地位は本質的な問題とはならず、むしろ、諸階級に対する(つまり支配階級に対しては? 従属諸階級に対しては? という)心理的關係の如何が問題とされる存在である(エンゲルスは、工場経営者であった時期にも、プロレタリアートの知識人、しかもこの階級の「大知識人」であった)。

「歴史的ブロック」は、基本的には、およそこのような階級論的の区分を前提として、基本的階級が自己の周囲に従属的諸階級を組織して形成される「社会的ブロック」を、それを固めるイデオロギーすなわち「上部構造」と、このブロックの客観的基盤としての「構造」との一体性において捉えたところ

8)「構造と上部諸構造とは、一つの『歴史的ブロック』を構成する」(Q 8 §182B, p.1051. 合I 289)。

ろに成立する概念である。ここでいま述べた「社会的ブロック」と、「知識人と民衆との社会的ブロック」とは、実体としては同一である。「知識人」は、基本的階級の「有機的一部」であるゆえ、いま述べた「社会的ブロック」は、基本的階級が自己の知識人を通じて従属的諸階級（民衆）を組織して形成されるものとして、「知識人と民衆の社会的ブロック」を階級論的視角から言い表したものにすぎない。

ここで便宜上、前者の「社会的ブロック」を「階級論的ブロック」と呼び、後者のそれを「知識人—民衆ブロック」と呼ぶことにするが、後者においてその要は、知識人の民衆に対する「活動的關係」にあったのと同様、前者においても、その要は基本的階級の従属諸階級に対する「活動的關係」であり、すなわちこれが「ヘゲモニー」である（引用(4)参照）。

この「ヘゲモニー」を通じて、人々の「構造」に対する「意識と認識方法」が転換し、彼らの意識において「構造」は、既存の経済生活の在り方を強いる客観的諸条件から、自己自身の発展にとっての客観的基盤へとその「意義と相貌」を変ずることによって、彼らの「社会的ブロック」は、彼らにとり、「それだけが社会的勢力をなすところの共通の生活が実現され」（引用(3)）る枠組となる。そこに「構造」（客観）と「上部構造」（主観）との新たな一体性が、つまり新たな「歴史のブロック」が成立することになる——というのが、グラムシの「歴史のブロック」概念が意味するところにほかならない。

したがって、「歴史のブロック」の概念は、客観（構造）と主観（上部構造：哲学・イデオロギー・意識）との歴史的統一性を含意する概念である（ヘーゲルのいう主観・客観の統一としての「理念」に相当、というよりも、その「分解」⁹⁾）。そして、この創造において「哲学」は「歴史となる」のであり、基本的階級は自己の歴史を創造する。それゆえ、「歴史のブロック」

9) グラムシはいつている。「ヘーゲルの『理念』は、構造にも上部構造にも分解され、哲学について一切の考え方が『歴史化』されたのである」（Q11 § 20 C, p.1420. 合II 190）。

は、歴史となる基本的階級自身の存在様式であり、この意味でそれは、常にいずれかの基本的階級の「歴史のブロック」である。そして、その創造において、したがって、このためのヘゲモニーの創造において、決定的な役割を果たすのが、その階級の知識人にほかならない。だからグラムシは、「具体的な歴史のブロックの必然的形態としてのヘゲモニーと同意の契機」¹⁰⁾について語り、歴史のブロックがそこにおいて創造される場所のこの「形態」における知識人—民衆ブロックの形成を「哲学の根本問題」の位置にすえたのだ、ともいえよう。

各人の「歴史のブロック」

ところで、グラムシにおいて「歴史のブロック」と呼ばれるものは、もう一つあった。「はじめに」でも述べたように、それは「人間」という「歴史のブロック」である。便宜上、これを「歴史のブロック」Bと呼び、先のそれを「歴史のブロック」Aとしよう。Bについてグラムシは知っている。

(6)「人間は、純個人的・主観的諸要素と、その個人が活動的に関係している〔é in rapporto attivo=活動的關係にある〕ところの集団の諸要素〔構成員たち〕〔elementi di massa〕ならびに客観的・物質的な諸要素との歴史のブロックとして考えられねばならない」(Q10 II § 48 II B, p.1338)。

この言及に明確であるように、この「歴史のブロック」Bも、前述の「歴史のブロック」Aと同様に、「活動的關係」を要としており、これによる主観・客観の統一からなっている。興味深いのは、この主客の統一は、当人の他の人々に対する活動的な関係によるのであり、だから相互的な言語的行為を通じて自己において成立する主客の統一であることである（但し、「個人」の「客観的・物質的な諸要素」に対する「活動的關係」それ自体は、「相互的な言語行為」ではない「活動的關係」である）。この点は、この「自己」を「基本的階級」に置き換え、「他の人々」を他の社会諸階級に変えて、「活

10) Q10 I § 12 B, p.1235. 合IV356.

動的関係」として「ヘゲモニー」をすえれば、「歴史のブロック」Aにもそのまま同様に妥当する。このように、いずれも単なる主客の統一でなく、「社会的なもの」の次元を介した「主体的」な主客の統一である、といえよう。

3. 「実践の哲学」の体系と主体的前提の3次元

自己包括的複合体という論理構造

このような「歴史のブロック」は、A、Bともに、その一般的論理構造においては、ヘーゲルの「概念」の弁証法、換言すれば「個別・特殊・普遍」の弁証法、この弁証法にもとづく「自己包括的な複合体」として成立している。このことは、これまで筆者が機会あるたびに繰り返し論じてきたが、改めて簡単に確認しておこう。

その「個・特・普」の弁証法とは、「個（個別）」をその具体的全体において把握する論理にほかならない。つまり、「個別」aは、多様な「特殊」要素b, c, d, e,等からなるが、そのなかである要素bが「特殊として現存する普遍」として、他の諸要素c, d, e,等を産出し、一全体（普遍）に統一している。その一全体が「個別」aにほかならない、と把握する論理である。そこでは、個別aの全体は、その一特殊要素bとしての自己を包括した一つの複合的有機体、この意味でまさに「自己包括的複合体」をなすことになる¹¹⁾。これを「歴史のブロック」A・Bについていうならば、「基本的階級」（Aの場合）あるいは「個人」（Bの場合）が「特殊として現存する普遍」と

11) この論理については、鯉坂真・有尾善繁・鈴木茂編『ヘーゲル論理学入門』有斐閣、1978年、第7章、特に141-142頁、および、牧野広義「ヘーゲルにおける自由の論理」『大阪経済法科大学総合科学研究所年報』15号、1996年3月、14-15頁、を参考にしている。なお筆者の「自己包括的」という表現については、実は、「人間存在と社会過程——マルクス」（小林一穂・他『人間再生の社会理論』創風社、1996年、第1章）の著者・小林一穂氏の、この書物の出版を準備する共同研究会の席における、マルクスの生産・交換・分配・消費の弁証法に関する「生産の自己包括性」という趣旨の発言に啓発されている。

して、他の特殊諸要素 c, d, e, 等（A の場合：他の諸階級と「構造」、B の場合：他の人々と「客観的・物質的な諸要素」）を、自己の「活動的關係」（A の場合：「ヘゲモニー」となる）を通じて一つの全体に統一しており、そこに成立する自己を包括した一つの全体・複合的総体が「歴史的ブロック」A・B である、ということである。

筆者にとり、『獄中ノート』におけるこの論理構造の存在は、最初、「実践の哲学」体系のそれとして看取されたものであった¹²⁾。しかし、『ノート』を仔細にみていけば、グラムシ自身が、最初の「哲学ノート」（Q 4）に先立って、Q 3 のなかで、それがラブリオーラの見地の継承であることを次の引用(7)の言及においてすでに示唆しているのであった。

(7)「ラブリオーラは、マルクス主義の哲学はマルクス主義自身に含まれていると主張して、史的唯物論に学問的基礎を与えようと探求した唯一の人である」（Q 3 § 31A, p.309)¹³⁾。

また次の言及には、「哲学的一般部分」が「真の固有の実践の哲学」として、「実践の哲学」体系全体の「特殊として現存する普遍」の位置にあり、これが、他の構成諸部分である諸科学を「結合」して一全体に統一し、一つの自己包括的な複合的体系を構成していることが、語られている。

(8)「[実践の哲学の体系的な論述については] 哲学的一般部分（これが真の固有の実践の哲学、すなわち、歴史、政治、経済の一般的諸概念が有機的統一において結合される弁証法の学ないし認識論）のなかで主要課題を展開したあとで、民衆用教程においては、各モメントあるいは各構成部分の一般的な基礎知識を独立した別の科学としてもあたえることは有益である」（Q 11 § 33 C, p.1448. 合 II 166)。

12) 拙稿『『実践の哲学』の地平』、松田博・鈴木富久編『グラムシ思想のポリフォニー』法律文化社、1995年、第2章。

13) この言及は、C 稿では次のように変えられる。「ラブリオーラは、実践の哲学が他のあらゆる哲学的潮流から自立的であり、自足的であると主張して、実践の哲学を学問的に構成しようと探求した唯一の人である」（Q 11 § 70 C, pp.1508-09. 合 II 20)。A 稿との対比から、グラムシにおける「実践の哲学」の「自立性」・「自足性」が、その内的体系の自己包括性に根拠づけられていることが明確になる。

次の言及も、ある意味では上記のことと同様である。「哲学」が、相互変換・相互翻訳の関係を保証する他の領域との「同一の世界観」を創造、錬成する仕事を固有の役割とするはずであるからである。

- (9)「哲学—政治学—経済学。もしこの三つの領域が同一の世界観の必然的構成要素であるならば、必然的に、その理論的諸原理の中には、一つのものから他のものへの変換可能性、それぞれの構成要素の固有の独自の用語における相互の翻訳関係がなければならない。すなわち、一つは他のものに含まれていて、全体が等質的な一つの円環を構成するのである」(Q11 § 65 C, p.1492. 合II 39-40)。

歴史主体の3次元

「実践の哲学」における哲学の、このような諸科学との結合は、知識人—民衆ブロック（結局は「歴史的ブロック」A）の形成を通じて「歴史となる」ことを想定している「実践の哲学」にとっては、その全体性から必然的に要請されることである。

このことにはまた、「実践の哲学」は、民衆を歴史の主体に形成する哲学であることも含意されている。前稿までは、「実践の哲学」が想定している歴史の主体として、階級（社会集団）と個人（人間）という2次元を区別していた。しかし本稿では、これを基本的区分としたうえで、さらに、前章において「歴史的ブロック」Aの論理構成を問題にした際に示した3区分、すなわち①「従属諸階級」（民衆・大衆）、②「基本的階級」、③「知識人」の3区分に対応するように、①「従属諸階級」（民衆・大衆）、②「基本的階級」、③「個人」という3次元の区別を考えたい。実際、グラムシは「実践の哲学」をこの3次元に即して、その主体化の哲学として構想しているとみられるのである。

グラムシは「実践の哲学」について、それを①「従属諸階級の表現である」¹⁴⁾ といっているし、②「国家となるであろう一階級の理論」¹⁵⁾ ともいっ

14) Q10 II § 41 C, p.1320. 合II 125.

15) Q 7 § 33 B, p.882. 合II 13.

ている。この「一階級」が、一つの「基本的階級」としてのプロレタリアートを指すことはいうまでもない（グラムシは、「階級」を「社会集団」と表現することが多くなるが）。この階級が「国家となる」ための哲学は、「従属諸階級」総体の「表現」でもあらねばならない、ということである。事実グラムシは、「実践の哲学の性格」につき、その「大衆」性を語っていても¹⁶⁾。③「個人」が歴史主体の次元として明確に位置づけられていることは、グラムシにおいて重要な点である。これを表す若干の言及を改めて挙げておこう。

- (10)「歴史は…いつも所与の瞬間に現存するものを改変するための諸個人と諸集団の継続的闘争である」(Q16 § 12 C, p.1878)。
- (11)「倫理的『改善』が純個人的なことであるというのは、錯覚であり誤謬である。つまり、個性の構成諸要素の総合は『個人的』なのであるが、しかし、この総合は、外部に対する活動なしには、つまり自然に対する諸活動から、ついには全人類におよぶ最大の関係に達するところの生を取り巻くさまざまな社会的範囲のさまざまな程度の他の人々に対する諸活動にいたる、外的諸関係を変更する活動なしには、実現せずまた発達しない。したがって、人間は本質的に『政治的なもの』であると言うことができる。というのも、意識的に他の人々を変えたり、指導したりする活動が、その人の『ヒューマニティ〔umanità〕』、その人の『人間の本性〔natura umana〕』を実現するからである」(Q10 II § 48 II B, p.1338)。
- (12)「人間とは何か。これは哲学の第一の主要な問題である。…真の〔reale〕哲学者は、政治家であり、また政治家以外ではありえない。つまり、環境を、すなわちどの個人〔ogni singolo〕もが加わっている諸関係の総体と解された環境を改変する行動人〔uomo attivo〕であり、それ以外ではありえない」(Q10 II § 54 B, pp.1343-45. 合 I 272-75)。
- (13)「実践の哲学は、…個人的に理解された哲学者であれ、社会集団〔プロレタリアート〕全体として理解された哲学者であれ、その哲学者自身がそのなかで諸矛盾を

16) グラムシは、「実践の哲学の性格はとりわけ、大衆の考え方〔concezione di massa〕、大衆の文化、だが統一的に行動する大衆の文化、すなわち観念において普遍的であるだけでなく、社会的現実においても『一般的なものとなった』行為の規範を有している大衆の文化であるという性格にある」(Q10 II § 31 C, p.1271. 合 II 117)、といている。

把握するだけでなく、自己自身を諸矛盾の構成要素として指定し、この要素を認識の原理、したがって行動の原理に高める諸矛盾の完璧〔piena〕な意識なのである」(Q11 § 62, p.1487. 合II 41-42)。

独自の主体次元としての個人の重視は、グラムシの階級史観における「知識人」概念の設定とつながっている。既述のように、知識人は、当人自身が置かれた経済的な階級所属の境界を個人として精神的・政治的に超出し、他階級の知識人になりうる存在である。「個人」の独自の定礎は、そのような存在としての「知識人」を理論的に基礎づける意義をもっているのである。ただこの場合、グラムシが繰り返し指摘する「すべての人間は知識人である」という命題を忘れないようにする必要がある。階級は「本質的に経済上の現実存在〔fatto〕」¹⁷⁾であるが、「個人」は、そうではない。グラムシの「階級史観」には、これらのことが考慮に入っており、個人次元の活動性（能動性）の問題を首尾一貫して考察しうるように再構成されている¹⁸⁾。知識人概念の導入は、こうしたことを意味しているのである。

ともあれ、以上のように歴史主体の3次元が想定され、その主体化を目的にして「実践の哲学」が考えられているとすれば、この哲学は、①「従属階級」（民衆・大衆）の哲学であり、②プロレタリアートの哲学であるばかりでなく、③個人次元では（引用12)中の言葉でいえば）「行動人」の哲学

17) Q15 § 18B, p.1775. 合VI 47.

18) これに関連して、「人間たちの意識」に関する「彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」という、「序言定式」における有名な命題について付言すれば、この命題は、いつも解釈者を機械論的・決定論的解釈に引き込み、俗流唯物論の二典拠となってきた。だが、「彼らの社会的存在」自体がグラムシの強調する「構造の諸矛盾」によりつねに諸矛盾を抱えており、この矛盾が、その反映として「彼らの意識」の諸矛盾を「規定する」と読むことによって、この自己の意識の内的諸矛盾をなんらかの仕方でも解消、解決、超克しようと努める各人の多様な（積極的あるいは消極的な）試みの必然性を首尾一貫して考察しうる道が開かれる。また「序言定式」の、「人間たちがそこにおいてこの衝突〔構造の矛盾〕を意識するようになり闘って解決する場である…イデオロギー的諸形態」という命題も、そのような読み方を前提にはじめてその決定的な重要性が合理的に理解されようであろう。

でもある、ということができよう。グラムシにおいては、この3次元の総体が、そこにおいて一定の「集団的意思」が形成されるところの「集団の人間」を構成することにもなる。

4. 基調テーマと包括的な概念・論理の枠組

中間総括と補足

以上においていくつかの論点が明らかにされた。第1に、グラムシにおいて哲学の「根本問題」は「知識人—民衆の社会的ブロック」の形成にあること、第2に、しかし結局これは、「歴史的ブロック」Aの形成を意味し、「知識人—民衆ブロック」自体が、包括的な概念枠組としてのこの「歴史的ブロック」概念から捉えられること、第3に、「歴史的ブロック」A概念は、筆者が自己包括的複合体と呼ぶ論理構造において成立していること、である。

しかし第4に、この論理構造それ自体は、『ノート』において他の諸概念にも、例えば、彼の「人間」概念としての「歴史的ブロック」Bにも、「実践の哲学」の総体的体系にも見出されるように、あるものの具体的総体を捉える弁証法論理として多様に使われること、したがって、「知識人—民衆の社会的ブロック」も一つの自己包括的複合体であろうこと、第5に、「歴史的ブロック」Aの要は「ヘゲモニー」であるが、これは、「活動的關係」の一ケースとしてあり、「活動的關係」はそれが表れるケースにおいて多様な表現をとること、「歴史的ブロック」B（人間概念）においては「活動的關係」それ自体として現れる、ということであった。

ここで第1と第2の論点に関し、「根本問題」は知識人—民衆ブロックの形成であるが、それを捉える概念は「歴史的ブロック」Aであるという点について補足すれば、これは、グラムシにおいて「哲学」の理論上の「統一的中心」が、次の点にあると記していることに合致しているということである。

(14)「哲学においては、—実践—すなわち、人間の意思（上部構造）と経済構造との関係」（Q 7 § 18 B, p.868. 合II 39)¹⁹⁾

みられるように「哲学」の「統一的中心」は、まず「実践」である。これは、この哲学が“「実践」の哲学”であることからして至極当然であるが、この「実践」とは、グラムシにおいて実は「現実」に対する人間の「活動的關係」なのである²⁰⁾。そして、この「現実」に対する「活動的關係」の主体である人間を主題にすえて、それを概念把握しなおしたものが、「人間」概念としての「歴史的ブロック」Bにほかならない。

そして、「実践」を、その具体性・歴史性において、イデオロギー（上部構造）を「必然的契機」とする「実践の転覆」への発展の論理において捉える命題が、すなわち、「人間の意思（上部構造）と経済構造との関係」であ

19) この見地は、「序言定式」につき、それを「実践の哲学の再構成のための最も重要な真の源泉」（Q11 § 29C, p.1141. 合II 206）とみる見地とつながっている。

20) グラムシはいう。「それ自体により、それ自体において、それ自体のためにある『現実』が存在するのではなく、それを変更する人間たちとの歴史的関係において存在するのである」（Q11 § 59B, p.1486. 合I 266）。この「歴史的関係」は、「現実」に対する「活動的關係」にほかならない。このようなグラムシの見地は、マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ」の第1テーゼの、「対象、現実、感性」を「感性の人間的な活動、実践として、主体的にとらえ」という命題に基づいている。そして彼は、同じく第1テーゼでいわれている『『革命的』活動、『実践的批判的』活動』をヘゲモニー創造における「イデオロギー」的活動として解し、そのイデオロギー（上部構造）を、「世界〔現実〕を変革し、実践を転覆すること」（Q10 II § 28C, p.1266. 合I 293）の必然的契機として、つまり「実践の転覆の必然的契機として」（Q10 II § 41XII C, p.1319. 合II 124）捉える。「実践の転覆」とは、既存の「現実」を日々再生産している人々の、労働と経済活動を含む実践的活動総体を改変することによって構造の基底から社会的現実を変革することなのであり、引用(5)という「実践的活動をその総体において変革すること」に一致する。

なお、竹村英輔氏はすでに、「グラムシにおける実践（prassi）は、人間の自然・社会に対する関係をしめす概念」（『グラムシの思想』青木書店、1975年、203頁）と指摘されている。だが、いかなる関係なのかについての言及はない。さらにあえて付言すれば、「人間の…社会に対する関係」という表現は正確さを欠く。正しくは、「社会環境」あるいは「他の人々（他の人間たち）」に対する関係、といわねばならないであろう。この点の不正確は、おそらく、既存の現実を再生産している人々の日常的な「実践」と、この「実践を転覆すること」で「世界を変革する」「実践」（マルクスのいう「革命的活動」）との概念的区別に関するグラムシの問題設定が看取されないままに、後者の「革命的」な変革の実践に引きつけて「実践」概念が理解されていることに関連している、と思われる。事実、竹村氏のグラムシ論には、「実践の転覆」に関する言及がみられない。

ると解される。ヘゲモニーは、一定のイデオロギーの普及を通じて、民衆のあいだに自分たちの在来の「実践」様式（実践的活動様式）を自ら変革する自己超克的な「意思」を「自発的」に呼び起こすことによって、その変革すなわち「実践の転覆」を組織し指導する機能でもあるが、基本的階級の（その知識人を介した）従属諸階級に対するヘゲモニーの関係（活動的關係）には、この機能が内包されており、その機能が有効に作用する限りでヘゲモニー自体が実現され、新しい歴史のブロックが形成される（注記20、参照）。こうして、「実践の転覆」へと展開するものとしての「実践」は、構造と上部構造との統一体としての「歴史のブロック」と一致する。

ともあれ、以上の考察から、「活動的關係」は、哲学上の現実概念では「実践」となり、「人間」観では「活動的關係」そのもの、歴史観（歴史の理論）では「ヘゲモニー」となり、論理的には、「活動的關係」概念がグラムシ思想全体の最基底に位置する要の基礎範疇だ、といえるのではないかと筆者には考えられる。

基調テーマと包括的な概念・論理の枠組の検証

それにしてもここでの問題は、「哲学」の「根本問題」としての「知識人—民衆ブロック」の形成という問題が、『ノート』全体に貫流する基調テーマになっており、「歴史のブロック」A概念が、全体の包括的な概念枠組として貫かれているとどの程度認めうるのかということであり、自己包括的複合体の論理構造が、どの程度重要性をもつのかということである。これは、他の主要大テーマ、すなわち「政治学」「イタリア知識人史」「アメリカニズムとフォード主義」のそれぞれについて、『ノート』の論述内容に即して検証してみなければならない問題である。以下、その検証を試みるが、その前に「哲学」に関して、若干述べるべきことがある。

1) 哲学

これまで述べてきた「実践の哲学」に関する議論は、すべて「概念」としての「実践の哲学」に限った議論である。というのは、『ノート』におけるグラムシは、「実践の哲学」の概念²¹⁾と、歴史的に事実として（マルクス主義思潮として）存在している（存在してきた）その現存形態とを区別して考察している²²⁾からである。彼からすれば、現存形態は、一方では、「実践の哲学」から「不老長寿の妙薬」を撰取するクローチェら、近代派高級知識人層の「観念論」に合体され、他方では、ブハーリンの『史的唯物論』体系が示すように「哲学的唯物論」に退行せしめられることにより、「二重の修正」²³⁾にさらされ、観念論と唯物論とに「分裂」しているのであった。それゆえ彼の『ノート』における「哲学」探求の全体は、観念論と唯物論との「分裂」の止揚・総合として彼が解するマルクス「フォイエエルバッハに関するテーゼ」における第1テーゼの“「実践」の哲学”に遡って、上の「分裂」の再止揚・現代的な再総合をはかる探求であった。

したがって、唯物論か観念論かという伝統的な哲学の「根本問題」は、か

21) グラムシの次の言及にその「概念」が表現されている。「正統性は…実践の哲学が『自分だけでことたれり』、たんに全体的、統合的な世界観、全体的哲学および自然科学の理論を構築するためばかりでなく、社会の統合的な実践的組織を生き生きさせ、つまり全体的で統合的な文明になるために、すべての基本的諸要素を内包しているという根本概念のなかにもとめられなければならない」(Q 11 § 27 C, p.1434. 合 II 208-09)。この「自足性」・自立的「全体性」と、内的体系の「自己包括的複合性」との関連については、注記13, 参照。

22) 現存形態につき、「時々存在するものは古いものと…の可変的結合」であると、グラムシは次のようにいっている。「実践の哲学は、世界史的発展の一契機ではあるとはいえ、新しい独立の独創的な概念であるという主張は、孵化しつつある新しい文化が独立性と独創性とをもっており、この文化は社会的諸関係の発展につれて発展するであろうと主張することである。その時々存在するものは古いものと新しいものと可変的な結合、社会的諸関係の均衡に照応する文化的諸関係の一時的均衡である。文化の諸問題がそのあらゆる複雑さにおいて提起され、首尾一貫した解決をめざすのは、国家の創造ののちのことである。いかなる場合にも、国家の形成以前の態度は、批判的、論争的であらざるをえない」(Q 16 § 9 C, pp.1862-63. 合 II 34)。

23) Q 16 § 9 C, p.1854. 合 II 23.

ならずしも無視，等閑視されるわけではない。その問題は、「実践の転覆」をめざす知識人—民衆のブロック形成というグラムシ的「根本問題」のなかに組み込まれ，時代の観念論的諸思潮と唯物論的諸思潮との批判・吸収・再統合の作業において不断に参照されるとともに止揚され，「概念」としての「実践の哲学」自体の錬成・豊富化・発展が追求されるのである。

それゆえ，彼の「哲学」テーマにおける探求は，二重の意味で「歴史」と分離されえない。一つは，哲学史の内部において探求されることである。グラムシは，「世界と人生についての自分自身の直感を批判的に首尾一貫して体系化すること」こそが必要なのであるが，「しかし，この練り上げは，哲学史の枠のなかで行わねばならず，その枠のなかでのみできるのだ」（Q11 §12C, p.1379. 合I 241），といている。もう一つは，現実の歴史における基本的従属階級（プロレタリアート）の闘争の発展段階との対応関係が決定的に重視されて課題設定じたいが考究されることである²⁴⁾。

2) イタリア知識人史

そもそも「実践の哲学」は，絶対的歴史主義に立脚しているゆえに歴史と分離されえない。もともと，その哲学は当初「史的唯物論」とグラムシ自身も呼んでいたものであり，それが「まさしくはっきりと歴史の理論」²⁵⁾であることは明白であり，「実際の歴史」（後述）の研究を予定しているものである。

24) これに関して一つだけ挙げれば次の言及がある。「闘争の，つまり民衆のシュトゥルム・ウント・ドラングのロマンティックな時期には，全関心は，政治においてはもっとも直接的な武器に，戦術の問題に，そして哲学の分野においては，小さな文化問題に向けられる。しかし，従属集団が現実により自律的となりヘゲモニー的となり，新しい型の国家を喚び起こすようになる時から，新しい知的道徳的秩序，すなわち新しい型の社会を建設する必要，したがって最も普遍的な諸概念，もっとも洗練されたもっとも決定的なイデオロギー的武器を鍛え上げる必要が生ずる」（Q11 §70C, pp.1508-09. 合II 22）。

25) Q11 §33C, p.1448. 合II 166.

イタリア知識人史の研究テーマは、グラムシにとっては「あらゆる哲学」の「根本問題」である知識人—民衆ブロックの形成という問題を、ルネサンス以来の自国のブルジョワジーの歴史のブロック形成の過程におけるその階級の各種知識人層の歴史に焦点を当てて分析、研究しようとするものであった。したがって、その分析の背後には、「歴史のブロック」概念が（当初から明確に、ではないとしても）潜むといえるのであり、この分析が、ルネサンス期におけるブルジョア国家形成における「組合国家」段階（コムーネ）での停顿、リソルジメントにおける農民参加の不在、したがって土地改革の欠如といった一連のイタリア近代化過程の限界や跛行性を問題にしていること自体が、その証左となろう。

それにしても、この大テーマは、Q8プランに示されるように、ルネサンス以降のイタリアの歴史と文化の複雑かつ多様な諸問題のほぼ総体を包括するようなきわめて大規模な研究テーマとして構想された。ここで指摘したいことは、この研究テーマの論題構成自体が、自己包括的な複合的構成という形で構想されていたことである。

Q8プランの執筆（1930年11-12月推定）と同じ時期・同年11月17日付のタティアーナ宛の手紙にグラムシは、研究プランに関して、「私は三つないし四つの主要な論題を選びました。その一つは、イタリア知識人が1700年代までもっていた世界主義的機能という論題で、この論題はあとで多くの部分に分かれます。すなわち、ルネサンスやマキアヴェルリ、等々がそれです」、と書いている。それが、Q8プランそのものにおいては、まず、「主要な試論：一般的序論。1870年代までのイタリア知識人の発展。さまざまの段階。」（傍点箇所は原文ではイタリック）と少し変更して書かれ、それに続けて、手紙でいう「あとで多くの部分に分かれます」の通り、「付録小説の民衆文学」、「フォークロアと常識」等に始まり「ルネサンスとマキアヴェルリ」に到る、計17の「多くの部分」が列挙されることになる。この「多くの部分」の複合的総体が「イタリア知識人史」であるが、そこには直接的な「イタリ

ア知識人の発展」史が基軸として含まれている。つまり、自己が自己を包括するという形をとっているということである。このようにして、ここにも、自己包括的複合体論理の使用例を見出すことが可能であろう。

3) アメリカニズムとフォード主義

第I次大戦を契機とする欧州の危機と、他方で米国から始まった世界史的な新しい工業化段階の開幕という歴史的局面に際会し、国際関係論的な視点からする同時代の米／欧／伊の（部分的には、ソ連、日本にまで及ぶ）国際比較を介しながら、自国ファシズム国家の経済的現実を取り上げ、「アメリカニズムとフォード主義」をモデルとして産業・経済の「合理化」を試みていた経済政策（とその急進的な論客たち）と各種文化人層の言論・文芸作品との分析（人称的な知識人分析²⁶⁾）を通じて、イタリアが当面している構造のおよび文化的諸矛盾の所在を具体的に浮かび上がらせようとしたのが、「アメリカニズムとフォード主義」の研究テーマであった（すでにQ1の§61から始まるこの考察の覚書・A稿をこの標題のもとにC稿としてまとめた『ノート』がQ22）。

ここでは、このようなテーマ立てからして、「歴史のブロック」という概念が、包括的な分析枠組となっていることがより直截に現れる。米国社会の特徴が、『構造』がもっとも直接的に上部諸構造を支配し、上部諸構造が『合理化され』（単純化され数量的に縮小され）ている、この型の合理化された社会」（Q22§2）として概括され、これとの対比において、まず、歴史の「古さ」から「純寄生的諸階級」（「鉛のmant」）が堆積しているヨーロッパ全般の「人口統計学的構成」の特徴が明るみに出される。そして、この

26) 竹村英輔氏は、「…グラムシのもっとも重要な特徴の一つとして、思想・イデオロギー・文化・理念、等々を論ずるさい、…つねに人称をもつ知識『人』諸個人の実践的営為として（明示されない場合も歴史的に限定された具体的主体を想定し得るようにして）、当の歴史的一時代、一社会に据えて考察する」（『現代史におけるグラムシ』青木書店、1989年、210頁）と、重要な指摘をしていた。

「不健全さ」が固有の「精神状況」を伴って、南部にいくほど著しいイタリアにおける後進的・土着的な経済的社会的構造が、都市と農村とにわたって仔細に分析される。そこでの問題は、この経済的現実には手を付けずに推進されている産業合理化が新たに引き起こす諸矛盾であり、またその諸矛盾を各種知識人層がいかに捉え、いかなるイデオロギーを生みだしているかであり、現に現れている「革新的」傾向と保守的傾向とのぎくしゃくし矛盾にみちた多様なイデオロギーの対立と混迷、それらは何を意味するのかといった問題である。「アメリカニズムとフォード主義」では、進行中のこのような「歴史」の諸相が具体的に分析される。ここでは、「知識人－民衆ブロック」の問題が、そのものとしては直接には現れないが、具体的に人稱を挙げてなされる多様なイタリア知識人の動静の追跡と分析の背後にあるのは、この問題であることは明白であろう。「強制のもとに、犠牲に耐えながら、この〔再建後の〕新しい秩序の物質的土台を創造しつつある社会諸集団」による「再建」への「期待」と彼らの「義務」が最後に語られている。

4) 政治学

『ノート』の4大主要テーマの一つとして筆者が位置づけている「政治学」テーマは、実は『ノート』執筆途上で、「哲学」からは国家論や情勢－力関係分析基準論が取り出され、「イタリア知識人史」からはマキアヴェルリ論が取り出されて、Q13（政治学ノート）において「自律的な科学としての政治学 [la politica come scienza autonoma]」²⁷⁾として独立化したテーマであった。この独立化には、「はじめに」で記した筆者のいう「歴史の3次元方法論」の明確化作業の進展が関わっている。そのことは、上記の情勢－力関係分析基準論が、最初の「哲学ノート」（Q4）からQ13に移されC稿として推敲される際に、A稿（Q4 §38, p.455）にはまったくなかった次の

27) Q13 §10C, p.1568. 合I92.

記述が加えられている事実にも表れている。その記述とは、この「政治学」に関する、「実際の現実〔*realità effettuale*〕への関心を呼び覚まし、政治的直観力を喚起するのに役立つ研究の、実際の諸基準と個別諸観察との総体と解される政治の科学と技術〔*arte*〕」²⁸⁾ という規定である。この規定にみる「実際の諸基準」とは、「はじめに」で「歴史の3次元方法論」におけるβの次元として記したもので、つまり歴史分析のための「方法論的諸規準」にほかならないし、また「実際の現実」というのも「哲学」と区別される「政治科学」や「歴史と政治の科学」が対象とする「現実」を意味するグラムシの固有用語にほかならない（これらについては再度、後述する）。

ともあれここでの問題は、「政治学」テーマのなかでも、哲学で「根本問題」であった知識人—民衆ブロックの形成という問題がいかに貫流しているのかいないのか、「歴史ブロック」概念が包括的な概念枠組としていかに働いているのかいないのか、という問題である。

そこでまず前者の問題についてみれば、この「政治学」が、君主と民衆との一体化をめざしているゆえにマキアヴェルリの『君主論』を評価し、自らの「政治学ノート」を「マキアヴェルリの政治学に関するノート」と題しているほどに、この『君主論』を範型としており、その探究が「新君主論」として、つまり「現代の君主」（知識人集団、特には「政党」）と民衆との一体化の創造をめざす探求として構想されているという基本的な事実のうちに、その貫流は歴然としていることである。

しかし他面、この「政治学」は、それ自体としては、その「統一的中心」

28) Q13 § 2 C, p.1561. 合 I 138. この覚書全体の内容は、本論で触れた“情勢分析規準”としての力関係の諸段階論であるが、これのA稿が書かれたQ4は、最初の「哲学ノート」である。それが、C稿となるとQ13に書かれるが、Q13は「政治学ノート」である。その内容が「実際の基準」であるゆえに「哲学」から「政治学」に移されたわけである。なお「政治の技術〔*arte*〕」とは、いかに歴史を創造するかという問題を主題とする領域を意味しており、そこでは闘争の形態・方法等が問題になる。有名なグラムシの「機動戦」／「陣地戦」区分は、その領域に属する議論である。

を、「国家と市民社会との関係——すなわち、教育者たる社会環境一般を教育するための国家（集中された意思）の介入」²⁹⁾ にすえている。とするならば、国家（政治社会）－市民社会関係が中心的な問題であることになる。ところが周知のように、グラムシにおいては「国家イコール政治社会プラス市民社会、すなわち強制の鎧を着たヘゲモニー」³⁰⁾ として、拡大された国家概念も用いられており、この広義「国家」における「政治社会」／「市民社会」区分は、「有機的区分」でなく「方法的区分」³¹⁾ であり、「国家が現出する二つの形態」³²⁾ の区分であった（「有機的区分」としての「市民社会」概念は、自由主義的概念であるとグラムシは考えている）³³⁾。そこでは「政治社会」は、「強制の鎧」という国家の「外殻」³⁴⁾ 形態であり、「市民社会」は、市民からの「同意」を生み出す「ヘゲモニー装置」「ヘゲモニー体制」として、「外殻」に保護された「国家の倫理的内容」であり、その「現出形態」である。

「市民社会」は、いわゆる「私的」な「諸組織の総体」として存在しており、指導階級は、それを通じて、つまり、その「私的」な「諸組織」に分属する指導階級の各種「知識人」層を通じて、ヘゲモニーを行使する。このヘゲモニーによってそこに形成されるのは、指導階級（指導的＝支配的基本的階級）を中心とする諸階級の「社会的ブロック」にほかならない。これは、「知識人－民衆のブロック」と内容的に同一である。したがってまた、グラムシの「市民社会」概念にも、われわれは、そこに「自己包括的複合体」の論理構造を見出すことになる。とはいえ、これは「市民社会」である限り国家の一契機（倫理－政治的契機）であって、「強制の鎧」の直接・間接の作

29) Q 7 § 18 B, p.868. 合 II 39.

30) Q 6 § 88 B, pp.763-64. 合 I 207.

31) Q 13 § 18 C, p.1590. 合 I 122.

32) Q 8 § 130 B, p.1020.

33) cf. Q 13 § 18 C, p.1590. 合 I 122, 参照。

34) Q 8 § 130 B, p.1021.

用のもとで成立しているにすぎない。この「政治社会」との絡み合いから分離されれば、「有機的区分」を立てる自由主義的「市民社会」概念に転じてしまう、というのがグラムシ固有の観点である。

またグラムシの国家概念には、「国家と個人の自由」の問題が内包されている。上に「市民からの『同意』を生みだす『ヘゲモニー装置』…」と述べたが、「同意」を生み出すとは「必然性と強制を『自由』に転ずる」ことを意味している。グラムシは、国家について、「しかし、どのようにして個人個人〔ogni singolo individuo〕が集団の人間に一体化することになるのか。同意と協力を獲得して、必然性と強制を『自由』に転ずるようになるには、どのようにして各人に教育的圧力を及ぼすのか？」³⁵⁾と問い、この「必然性と強制を『自由』に転ずる」圏域として、「市民社会」を意義づけている。「強制」とは、法的国家的強制であり「政治社会」を意味するが、「必然性」を規定する前提条件は「構造」にほかならない。それゆえ、この議論の背後にも、構造と上部構造との一体性、すなわち「歴史のブロック」の概念枠組が控えているのである。さらにいえば、「歴史のブロック」Bも包含されている。というのは、当該国家の指導階級の成員である場合、その個々人は、上の引用でいう「集団の人間」への参入・「一体化」を通じて、自己の「歴史のブロック」Bを再編・拡充し、自律的人格性を獲得・発展させるという論理が、当の引用句には潜むと読みうるからである³⁶⁾。

また、情勢—力関係分析基準論の内容は、前述したように歴史分析のための「実際の基準」であり、またそれゆえに「政治学」の構成要素となっているのであるが、もともとそれは、そのA稿が「構造と上部諸構造との諸関係」と題されていたことに示唆されるように「歴史の理論」(哲学)における構

35) Q13 § 7C, p.1566. 合I 195.

36) この個人の「歴史のブロック」の再編・発展過程をグラムシは、「毛細管的過程」から「分子的過程」へという概念を用いて考察する。取り上げた引用句で、「自由」に括弧が付けられているのは、従属階級の成員においては、括弧なしで「自由」とは単純にはいえないからである。

造と上部構造との関係、両者の一体性という概念を「変換」したものである(後述)。この意味でも、結局、「歴史のブロック」概念が背後に生きていることが知られよう。

5. 国際的－民族的視点と歴史の3次元方法論

「展望は国際的・出発点は民族的」

さて以上に検討してきたところから、「哲学」の「根本問題」たる「知識人－民衆ブロック」の形成という問題が、「イタリア知識人史」にも、「アメリカニズムとフォード主義」にも「政治学」にもほぼ一貫して流れており、したがって、この問題を『ノート』の基調テーマとみなしてさしつかえないであろうこと、そして、この基調テーマを捉える包括的概念枠組として、「歴史のブロック」A概念が、同じく上記3つの主要大テーマにも貫いていること、またこの概念を構成する論理としての「自己包括的複合体」という弁証法的論理が、「歴史のブロック」A概念以外にも、多々使用されていること、これらが一応検証されたといつてよいであろう。

しかしそうだとすると、『ノート』の全容把握としては、こうした概念的・論理的な枠組の一貫性を掴むだけでは尽くせない。それは、「はじめに」で述べたように、『ノート』における「歴史」分析の方法論の問題が残っているからである。この方法論が、筆者のいう、歴史の3次元方法論であるが、これをとりあげる前に、『ノート』の歴史分析を貫く視点として、グラムシの国際的－民族的視点とでもいいうる問題と、彼の「実際の現実」という概念について踏まえておくことが必要であろう。

これまで検討してきた基調テーマや「歴史のブロック」A概念は、いずれも一国的な枠内にある問題である。しかしグラムシは、これらの概念を通して一国の諸関係を捉える場合にも、つねに国際的諸関係との絡みにおいて捉え、分析していった。

たとえば、「イタリア知識人史」は、イタリアという一国のそれであるが、

それは、対外的作用と国際環境からの影響など、つねに国際関係との絡み合いのなかで分析されている。ヴァチカンを頂点とするカトリックの教会組織は、「世界主義的」な国際的組織であり、イタリア近代国家の成立をつねに妨げてきた。ようやく19世紀に近代国家確立運動・リソルジメントが起こったが、これは一つの「受動的革命」として捉えられている。この「受動的革命」というグラムシの概念自体が、「先進国」との関係において後進国に成立する出来事を表している。一般的に「先進国／後進国」、あるいは「中心／周辺」という、帝国主義段階で激しく浮上する不均等で緊張にみちた国際的諸関係、さらに「東方／西方」という文明の型の相違など、きわめて歴史的な国際関係のもとで形成された地域的固有性ないし差異性の問題は、下獄により未完で終わった原稿「南部問題」の執筆（1926年）以来のグラムシの一貫した歴史認識における重要問題であった。

「アメリカニズムとフォード主義」は、まさに「東方」におけるソ連邦の出現と、「西方」における「欧／米」関係の経済的地位における逆転情勢の登場という事態を眼前にして立てられた主題であり、イタリア（広くは欧州）における「アメリカニズムとフォード主義」導入の試みは、新たな「受動的革命」を招来させるか否か、という問題設定（Q22 § 1 C）のもとに考察されているし、支配階級とその知識人層との国際組織としての「ロータリークラブとフリーメーソン」（および国際教化組織としてのYMCAとイエズス会）が、比較検討の対象に位置づけられている。また、移民と人種（黒人）問題が重視されていることも、民衆や労働者階級の内部構成を国際関係との絡みで捉える視点と無関係ではない。

彼のこうした視点と感覚は、モスクワ・ウィーンでの在外体験（1922年6月～24年5月）を契機としているが、その前史には、第1に、トリノ大学時代に、パリのジリエロンによる「言語地理学」を洗練させて反実証主義的な「新言語学派」を立ち上げ、それを歴史・地理・社会諸部門に押し広げ、のちに「空間言語学」と改称した恩師・バルトリ教授³⁷⁾から受けた歴史言語学

〔filologia〕の教養がある。第2には、これに重なるかたちで、前述のヴァチカンの存在に関わり、さらにはローマ帝国にまで遡るものとして彼が問題視するイタリア知識人の「世界主義的」伝統を克服するという問題意識があったであろう。この視点の集約的表現として、ここでは、“展望は国際的・出発的は民族的〔nazionale=国民的〕”と要約しうる視座³⁸⁾が彼の一貫した視点であったことを確認しておきたい。その国際的側面は、ブルジョアジーの国際的性格、したがってまた、それに規定されたプロレタリアートの、人類の統一に向かう国際的性格という階級史観にもとづいている。そこからまた、国際的・国内的諸状況を、対立し合う諸階級間の力関係の結果として掘む視点が成立する。グラムシは、『『民族的関係〔国内関係〕』は（ある意味で）『オリジナル』な統一的結合の結果³⁹⁾』として掘む必要性を提起しているが、国際関係についても、そこには「統一的結合」こそ存在しないとはいえ、力関係の結果として把握することが必要である点は、同様であろう。

「実際の現実」「実際の歴史」

このような「実践の哲学」の階級史観に基づく認識から、グラムシの«*realità effettuale*»（レアルター・エッフェツツアーレ）という概念が成立することになる。それは、一般的な概念としての«*realità*»（レアルター＝現実）と区別して立てられた概念であり、内的諸矛盾によって分裂している社会の必然的な闘争の、恣意と偶発性にみちた雑然たる結果として成立する現

37) このバルトリ言語学の特徴については、アントニオ・グラムシ研究会（第三期）・第1回研究会（2007年5月12日）における中村勝己氏の報告レジュメ「マルクス主義における言語論的転回と空間論的転回のマトリックスとしての初期グラムシ——サルディーニャ島出身の言語学徒はいかにしてマルキストとなりし乎」、による。

38) グラムシはいつている。「発展は国際主義に向かっているが、出発点は『国民〔nazionale=民族的〕』であり、この出発点からスタートしなければならない。しかし、展望は国際的であり、国際的でしかありえない」（Q14 § 64 B, p.1729, 合 I 200）。

39) *ibid.* 同上。

実を指し、その力関係の一定期間の持続的均衡の枠内で生じている差異と不均整、食い違いや裂け目、偏倚等が遍在してデコボコしている図式化できない多様・多彩な経験的現実、土着と外来・新と旧などの異質な諸要素が混成しているきわめて歴史具体的な・生々しい・“本当”の・現実、こうした直接的事実関係からなる現実を意味するであろう。文脈により、「*storia effettuale*」（ストーリーア・エフフェッツアーレ）ともいわれるが、筆者はこれを「実際の歴史」と訳し、「*realità effettuale*」を「実際の現実」と訳している⁴⁰。この「現実」は、諸矛盾を地盤としているゆえに「弁証法」（歴史的諸力の弁証法）が貫くが、それが直截には現れない。グラムシのみるところ、「なぜなら、現実の歴史においては、弁証法的過程は無数の部分的諸契機に細分化されるからである」⁴¹。この「現実の歴史」は、「実際の歴史」にほかならない。

「実際の現実」「実際の歴史」という訳語の適否はどうであれ、これがグラムシの「歴史」研究（「歴史と政治の科学」）が対象とする「現実（歴史）」であり、国内諸関係の固有の「地形」や諸事象各々の差異的諸特徴の「個性」の把握、固有性把握が目指される。それゆえ、図式主義的分析とは無縁であるどころか、その正反対物であり、「理論」のための例証主義的分析ともなおさら縁がない。

歴史の3次元方法論

このような分析を可能にする方法論が、『『社会の科学』方法論』として別稿で明らかにした重層的な「歴史の3次元方法論」である。その3つの次元

40) この「*realità effettuale*」は、マキアヴェルリ『君主論』中の「*verità effettuale*」から来ていると思われるので参考までに記しておく。池田廉訳『君主論〈新訳〉』では、それが「生々しい真実」と邦訳され（中央公論、1995年、90頁）、さらに訳注で、「*effettuale*の語は、*reale*（現実の）よりも、さらに『生々しい』（185頁）と説明されている。

41) Q10 I § 6 C, p.1221. 合IV334.

は、 α)「哲学」、 β)「方法論的諸規準〔*criteri metodologici*〕」、 γ)「歴史と政治の文献学〔*filologia*〕」であった⁴²⁾。それを改めて簡略に述べ、各次元の事例として、これまでの論述のなかから該当するものを簡単に摘記しておこう。

α)「諸矛盾の理論」「弁証法の学、つまり認識論」と規定されたり、あるいはまた「歴史の理論」とも規定されたりする、本稿でみてきた「哲学」が、「歴史の一般的方法論」⁴³⁾となる。「歴史のブロック」Aや、その他の本稿でみてきた主な諸概念を含む一般的な諸概念は、そこにおいて有機的に結合され統一される。

β)「哲学」研究や「歴史」研究のなかで立てられながらそれをを用いて経験的分析が進められるところの固有の「方法論的諸規準」。これは、「歴史と政治の研究と解釈の実際的諸基準〔*canoni pratici*=実用的諸基準〕」と規定されるところの、「哲学」の翻訳・変換形態である。それゆえその内奥には弁証法が潜んでおり、諸基準の「体系的展示」が可能であると構想されていたが、『ノート』執筆自体の途絶によってそれは果たされなかった。ともあれ、この諸基準の若干例を挙げれば、前述の情勢一力関係分析の基準は、「展望は国際的・出発点は民族的」の観点に則った最も包括的な「実際の基準」にはかならない(Q4「哲学ノート」のなかで立てられ、そのC稿はQ13「政治学ノート」に移される)。その他数多いが、「ある階級は2つの様式で支配的である。すなわち『指導的』で『支配的』である」⁴⁴⁾とか、「一つの独立した知識人階級が存在するのではなくて、それぞれの階級が自己の知識人をもつ」⁴⁵⁾といった周知の諸命題は、Q1のリソルジメント研究のなかで立てられた「実際

42) この3次元区分を直接に示すグラムシの言及は、Q16§3C, p.1845. 合IV273.

43) Q11§25C, p.1429. 合II162.

44) Q1§11A, p.41. 大月版『グラムシ獄中ノート・I』132頁。C稿は、Q19§24C, p.2010. 合II228.

45) Q1§11A, p.42. 同上大月版133頁。C稿は、Q19§24C, p.2010. 合II228.

的基準」である。実は、「政治社会／市民社会」の「方法的区分」も「実際の基準」であり、「受動的革命」概念もその一つなのである。

γ) 「歴史と政治の文献学」とグラムシが呼ぶ次元。これは、諸社会やその個別諸事象の観察・比較、類比・類推を通じてそれらの固有性を捉える方法論であるが、他面で、個別諸観察の集積から蓋然的な（必然的ではない）経験論的法則性（傾向的法則）を抽出・定式化あるいは図式化し、次からは、それが個別諸事象の固有性把握の「道具」として使われる。その代表的な「定式」の一つは、「定比の理（定比例的法則）」である。これは、実は「アメリカニズムとフォード主義」（Q22）において、一国の社会経済構造の分析の端緒となる「人口統計学的構成」の分析において援用されているし、政治学や組織論の分野においても分析の方法用具となるなど、グラムシ特有の「量－質の弁証法」と結びつけて広く用いられる道具的「定式」である（付言すれば、Q22では、この「定式」の援用を通じて、社会全体における人口の性別・年齢構成の問題が俎上にのぼせられ、人口再生産の経済的機能－量－と、性文化－質－の両面にわたって「性問題」が検討されていることは、事例としても特筆されてよいであろう）。また、グラムシの「カイザリズム（シーザー主義）」概念は、このγ次元の「道具的」概念である。

およそそのような重層的な方法論によって「実際の現実（歴史）」が分析・考察されるため、その内容は非常に多様・多彩で複雑になる。理論的考察のテーマにおいても、その思想史的・理論史的側面には、この方法論が及ぶ。また「政治学」にも、それが「政治の科学と技術」として「実際の諸基準と個別諸観察の総体」と規定される限りで、やはりこの方法論が入り込むのである。こうした結果、本稿が明らかにしてきた一連の概念的・論理的枠組の一貫性は、「歴史」分析においては、それらは基底のα次元に貫くのであるが、しばしば『ノート』の叙述の奥に隠れ、それとしてはほとんどみえなくなるほどになる。β次元の「実際の諸基準」は、個々にはそれとして文面に

明記される限りで、個別的に読者の眼の前に現れるが、その内部に潜む論理（弁証法）は、いちいちそれとして語られてはいない。こうした事情に加えて、叙述形式の断片性、その他⁴⁶⁾が絡んで、『ノート』は一大難解書としてわれわれの眼前に立ち現れることになる。

むすび

本稿は以上において、如上の理由から『ノート』の叙述の背後に隠れている基調テーマとそれを捉える包括的な概念の枠組、およびその論理構造をそれとして取り出すことを試みた。そして、そのあと、なぜそれがそれとしては直截には表れず、むしろ見えなくなるのかを解き明かすことと結びつけて、グラムシの「実際の現実（歴史）」を対象とする歴史方法論を改めて説いてきた。そこから明らかになった主な論点を要約すれば、およそ次の4点に示されるであろう。

1) 『ノート』全体の基調テーマは、「知識人—民衆の社会的ブロック」の形成であったが、それを階級史観から捉える概念枠組としての「歴史的ブロック」A、その論理としての「自己包括的複合体」を構成する「個・特・普」の弁証法が全編を貫いている。

2) 「歴史的ブロック」Aの要（かなめ）は、知識人に媒介された基本的階級の「ヘゲモニー」であったが、「ヘゲモニー」は、「活動的關係」一般の一特殊ケースであり、「活動的關係」は、「哲学」においては、その「統一的

46) 『ノート』が難解である理由に関しては、①叙述形式の断片性のほか、②探求・推敲途上の未完性、③そのままの発表を予定しない覚書の性格、④文脈による言語表現の変化や用語の多義性、⑤諸概念や諸論点が、他の覚書の一見無関係にみえる概念や論点とも多様に結びつき、複雑な網目を形成しながら思考の練り上げが展開していくという特徴、⑥イタリア人以外にはあまり知られていないイタリア事情の細部に立ち入った議論がかなり記述されていること、⑦獄吏の監視に加えて、家族を残しているモスクワの当局からも監視されているという二重の監視下での記述であることなどが、従来から指摘されてきた。それらは事実であるが、それだけに大切なのは、解読の試行を重ねて思想内容の内的な体系性と一貫性を掴むことである。

中心」としての「実践」（現実に対する人間の活動的關係）となる。「哲学」の「統一的中心」は（この「実践」の「実践の転覆」への発展の論理を内包した具体性・歴史性からすれば）、構造と上部構造との関係でもあったが、この構造と上部構造との一体性が「歴史的ブロック」Aにほかならない。この「ブロック」の要をなす（つまり、ブロックを形成する）「ヘゲモニー」は「実践の転覆」（世界の変革）を組織・指導する機能でもあった。だからいわばそれは、人々の「活動的關係」の総体を変革する「活動的關係」なのである。

3) 「歴史的ブロック」Aは、自己包括的複合体の論理構造において構成されているのであるが、この論理構造は、『ノート』において重要な意味をもち、随所にその適用を見出すことが可能であった。個人—人間の概念としての「歴史的ブロック」Bがそれであり、知識人—民衆ブロック自体がこの論理を秘めている。その他、ある限定的な意味では「市民社会」もそうであり、「イタリア知識人史」の研究構想もその問題構成がこの論理で立てられていた。そして広義「実践の哲学」総体の体系構造がまさにそれであり、その自立的全体性という主張は、そこに根拠をすえていた。

4) この「実践の哲学」の自立的全体性という主張は、絶対的歴史主義＝絶対的人間主義と結びついており、「哲学・政治・歴史の同一性」をも含意する。したがって、『ノート』における「歴史」研究は、この「哲学」を「認識原理」・「一般的方法論」とするが、その研究対象は、「展望は国際的・出発点は民族的」という視点からする「実際の現実」であり、「哲学」と「実際の現実」把握とを方法的に媒介する2つの次元が設定される。そこに成立する歴史方法論が、 α) 「哲学」と、 β) その翻訳・変換形態としての「実際の諸基準」、 γ) 「実際の現実」に、より直接的に呼応した「歴史と政治の文献学」という「3次元方法論」であった。

これらから、全体としての『ノート』の構造は、1) が基本をなすが、単調ではなく、上記のような重層的・立体的な、理論的および方法論的構造に

おいてある、ということができようであろう。このことは、『ノート』が一つの体系をなしていることを意味しなければならない。

これまで、全体としての『ノート』に関しては、それが一つの体系として把握され、その内部構造が、上記のような複合的・立体的な構造において把握されたことは、ほとんどなかったといってよいであろう。とはいえ、『ノート』全体を知識人論として読むということはしばしば語られてきたし、また鍵概念の所在としてヘゲモニーの概念が多くの論者から提起されてきた。以上に示した本稿の検討結果は、それらと対立するのではなく、むしろ基本的に一致する。

本稿では、「知識人—民衆の社会的ブロック」の形成が『ノート』全体を貫く基調テーマをなすとみているが、そこにおける知識人—民衆関係は、相互的な活動的關係としての「知識人—大衆弁証法」としてあり、より意識的・活動的、だから指導的であるのは知識人の側である。したがって全体として焦点が当てられるのは知識人の側に対してである。グラムシにおいてその知識人は、基本的階級と広範な民衆総体とが現実に歴史の主体として自己を形成する媒介であるが、現実に指導的であってはじめてその媒介としての機能を果たしえ、民衆との「社会的ブロック」の形成における環となりうるという特殊な存在である。「環」であるゆえに、『ノート』は知識人の側に焦点を当てるのである。しかし知識人は、あくまで「媒介」であり、そこに焦点を当てる目的が、一貫して民衆自身の主体化、「民衆の創造的精神」⁴⁷⁾の発揚、発展にあったことがつねに念頭におかれねばならない。

また「ヘゲモニー」が鍵概念であるという議論に関しては、本稿も改めて上記2)で確認したように、この概念を「歴史的ブロック」の要として提示しているが、その基礎に「活動的關係」概念が存しており、これを要の基礎

47) Antonio Gramsci, *Lettere dal carcere*, a cura di Sergio Caprioglio e Elsa Fubini, Einaudi, Torino, 1965, p.59. 大久保昭男・坂井信義訳『グラムシ獄中からの手紙・愛よ知よ永遠なれ』第1分冊、大月書店、1982年、74頁。

範疇として「実践－実践の転覆」概念に通じていることを明らかにした。「活動的關係」－「実践－実践の転覆」－「ヘゲモニー」は、相互翻訳関係にあり、それらが、「哲学・政治・歴史」の各次元の把握を、それぞれにおいて問題とされる個人的・集団的な「主体」の活動的關係として動態的な把握とする「要」（鍵概念）となっている、と解するのが本稿の立場である。本稿は、「鍵概念」としての「ヘゲモニー」という従来解釈を拡大し、その基礎範疇（活動的關係）から捉え直したといえるであろう。

それにしても、「哲学」の「根本問題」から始めた本稿の考察全体を通じて、「理論」と「歴史」の両面にわたる『ノート』における「実践の哲学」の自立的全体性というグラムシの主張の意味の重要性が改めて認識される。この主張には、「実践の哲学」の理論としての具体的普遍性という主張が含まれているが、その普遍性の証明は、「実際の現実のよりよい把握を刺激し、助けることで、あたかもオリジナルな表現であるかにこの現実に一体化する」⁴⁸⁾ ところにある、と考えられている。「理論」と「歴史」の二重構造の基礎をなすのは、それ自体一つの哲学であるこの弁証法・認識論にほかならない。言い換えれば、「理論」と「歴史」の二重構造は、この哲学の具現化を表しているということである。さらにその根底には、歴史のなかであらゆる異質な諸思想・諸思考様式の批判的吸収を通じて自己を不断に豊饒化させ、現実に対する「批判的－実践的」反作用力を不断に強化する歴史的過程のなかにも自己の生命・存在理由を認める知的体系としての「実践の哲学」という概念がある。そうであるとすれば、これらの具現化としての『ノート』二重構造自体が物語っていることは、今日依然として求められている理論と歴史、理論と実証、理論と実践を統一しうる新しい学の体系、新しい知のパラダイム創造の企てが、現にそこにあるということにほかならない。

本稿で提示した議論そのものについては、今後なお検討と推敲が重ねられ

48) Q 9 § 63 B, p.1134. 合VI125.

ねばならないとしても、『ノート』総体をこのように受け止める，この受け止め方こそが，世紀を越えて世界が大きく変化したにもかかわらず，なおグラムシが異彩を放ち，むしろ近年ますます多方面からの注目を国際的に集めている深奥の理由についての理解をわれわれに得させ，ひいては『ノート』研究の水準を質的に高めうる原点にならねばならないのではないかと筆者には思われる。